

事が出来なかつたのであるか、シヤンカラはこの疑難に答へ、徳不徳なくんば如何なる當體も來生すること能はざると同時に、當體なくんば徳不徳の所依も亦その存する所なし、畢竟是の如き論議は論者をして思惟の二律背反に誘致せしむるに過ぎずとして居る、彼れの學説上亦止むを得ない結果であらう。これに依て我々は現象界を實有と見る場合に於て、その開關に關する議論は、究竟論理上の See-Stay 戯に陥らざるを得ないといふのが彼れの主張である事を知るのである、實際彼れに依れば、所謂實有の世界は無始の切初から存し、その切初の如何は遂に我々人間言語思惟の域外にありとなすのである。

尙、彼れの所謂根本無智論、時間空間に關する論議、その他眞智論に關聯して紹介すべき事項多々あるも、こゝに之等を割愛する。(Cf. Frazer, Indian thought past and Present, 1915.)

彙報

京都哲學會秋季大會

十月十四日(土)、午後一時より法科大學大講堂に於て開催。松本教授の開會の辭に次いで左の如き講演があつた。

○社會學的認識論 京都法文科大學講師 米田庄太郎氏
○探究の態度と安立の態度

東京文科大學教授文學博士 姉崎正治氏
右講演終了後引き續き學生集會所に於て、姉崎博士の歡迎を兼ね京都哲學會秋季大會晩餐會が催された。因に兩氏講演の内容は追つて本誌に載せらるゝ筈であるから此處には略す。

心理學讀書會

新歸朝の野上助教授の歡迎、大槻講師の送別等を兼ね、十月七日午後四時より、心理學實驗場内演習室に於て例會開催、野上助教授の『歐米心理學實驗場視察談』あり。續いて大學本部樓上に晩餐會を開き九時談笑裡に散會した。

新著紹介

宗教と人生

帆足理一郎著

本書は著者が年を累ねて『新人』誌上に寄せた宗教論や社會批評を輯めて一卷と爲したもので、其流暢な筆に現はれた意見や感想